

食育は みんなの スタート ライン

合同出版

「食べるって
何だろう」を
考える
子どもたち

東京都三鷹市立
南浦小学校「編」
松原邦宜「監修」

はじめに

食育が学校・家庭・地域の一体感を生む架け橋になった

東京都三鷹市立南浦小学校校長 松原邦宜

食育との出会い！ 学校が変わる！

「校長先生、子どもたちだけじゃ、畑を田んぼに変えるのは大変だ。大人が二十人とトラック二台が入れば、いい田んぼになるよ」。今、地域からの温かい応援の電話が、南浦小学校の食育の活動を支えています。

平成十七年四月、三鷹市立南浦小学校への着任が決まり、期待を込めて課題に取り組んでいこうと学校の門をくぐりました。「話を聴いてもらいたい」「学校のなかが見えない感じですよ」「子どものことで、相談があります」。真剣な保護者からの電話が驚くほど多いわりに、地域からの来校者は少ない毎日でした。

子どもたちが健やかに育ってほしいと愛情を注ぐ保護者、人と深くかわりを持たせながら個の持つ力をぐんぐん伸ばしたいと奮闘する教職員、子どもたちの笑顔を楽しみに活動を続ける地域。



松原校長と子どもたち

みんなが一生懸命なのに、かみ合わない現状をみんなが感じている気がしてなりませんでした。『みんな、子どもたちのことを思って一生懸命なのは、間違いないの？』

子どもたちが学校で生活する時間は、一日の三分の一で、三分の二は家庭や地域で過ごしています。一人ひとりが、学校と家庭・地域とでまったく違う考えのなかを生きていくとすれば、子ども自身が混乱するのは間違いありません。『一人の子どものために、学校・家庭・地域が一体となってやるしかない』。私は、いつもこのように考えていました。

同じ年の十一月、私の目を見開かせてくれた食育との出会いがありました。『三鷹産野菜カレーの日』。三鷹の地元で取れた野菜をふんだんに使ったカレーとサラダを給食のメニューとしたのです。

学校給食での取り組みは、私の学校経営方針に確実にフィットしました。本校のランチルームにおい

て、六年生の子どもたちを中心に、地場産野菜を学校に入れてくださった農家の方、野菜たっぷりカレーの食の様子を見守るJA東京むさし三鷹地区青壮年部の方、質の高い給食の実現を願う市の関係者、安全でおいしい給食を懇願する保護者、子どもがおいしく食べる笑顔を見守る学校と、九つの食卓を子どもと大人が共に囲み、味わったことがないほど賑やかで、皆、話に花が咲いています。

「今日、みんなが食べているブロッコリーは、私が作りました」

ほかの教室の給食時間中に、各教室を回った野菜生産者の一言に、「おじさん、すごいね。おいしいよ。これからも頑張ってください」「残せないな！しっかりと食べるよ」という大勢の子どもたちの笑顔と歓声を、二年以上過ぎた今も忘れることはありません。

『食育で、子どものために学校・家庭・地域が一体となれる』。本校の食育はスタートしたのです。

食育はみんなのスタートライン

食べることは、子どもも大人も「毎日欠かさずに続けている人間としての営み」と言っても過言ではありません。しっかりと学び、人とかかわりながら己を磨き、丈夫な体で一日を大切に過ごすために、その生活の土台を成す必要不可欠な位置にあるのが「食」だと思います。

また、『食卓を囲む』、『暖かさ』とすぐに結び付くほど、共に食することで、ほかほかと心が温まり自然に感謝の気持ちを表現できるなかで、人と人との絆が深まっていくことが、食が持つて

いる魅力です。

先ほども述べたように、食することは毎日のことなので、各家庭の差はあっても同じ経験・体験を日々続けているという意味から、食育を進める際にみんなが同じスタートラインに立てる良さがあります。学校では、みんな同じメニューの給食を食するので、〈食育、よいドン！〉と合図を送りやすいのは事実です。

そして、学校での食に関する学びを家庭での食に活かしていける可能性が高く、家庭での食を学校で見つめ直していけるという利点があり、生活に直結できるという教育の原点に踏み込んでいけることが、食育の特性だと私は感じています。

食育と出会い、より大勢の地域の方と接し話をさせていただけの機会も増えました。保護者の方から教育活動に対するご支援をいただく場面が増え、大勢のみなさまが南浦小学校の食育に関心を寄せていただいていることを、肌でひしひしと感じる毎日です。

南浦小学校に着任してからの三年間で、保護者からの電話の質は随分と変わってきました。校長室への地域などからの来校者は、人が途切れることがないほど多くなっています。南浦小学校が進めてきた食育は、まさに、学校・家庭・地域の一体感を生む架け橋の役目を果たしてくれています。

子どもも大人も食育！ 二年間の南浦小学校食育の旅

学校内を見渡したとき、食育に関する取り組みについては、今まで縁の下の力持ちとして頑張っ

ていただいていた学校栄養職員、事務・用務主事、給食調理業務者の力も、教員と同じ輪のなかで発揮してもらったことができたように感じています。本校独自の取り組みである、朝ごはんの重要性の啓発をねらいとする「朝ごはん集会」には、隣の中学校からの応援が入ることになりました。食育は、確実に人の輪を広げてくれています。

そして、食育に取り組んでいくなかで、子どもたちとともに食に関する取り組みを続けていくことと同様、大人である私たちが食に関して本気で考えていくことの重要性に、私自身、気付かされました。

気付いたときに、すぐに共に考え動いてくださったのが、本校PTAや親父の会でした。食育講演会や食の重要性を考える合同フォーラムの実施など、学校を中心に厚みのある食育を展開できたことは、本校の大きな喜びでもあります。東京農業大学教授小泉武夫先生や東京大学名誉教授養老孟司先生から、また女子栄養大学短期大学教授金田雅代先生、同准教授香川明夫先生から、直接食にかかわる貴重なお話を聴くことができて、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

遠方の方や企業の方ともコンタクトを取るなかで、輪島功一元WBA世界ジュニアミドル級チャンピオンのお話や、ヨーコ・ゼッターランド文部科学省企業スポーツ調査研究有識者会議委員とともに本校の給食を食しながらのお話を聴かせていただくなど、貴重な経験もさせていただきました。

また、食への情熱は、白石ユリ子ウーマンズフォーラム魚代表や、山下一穂高知県有機のがっさう土佐自然塾長との出会いを導いてくれました。食の大切さを広げていこうと情熱を傾けるエッセ

イスト本間千枝子先生のご尽力によるところです。本間先生のお話も、一つ一つ私たちが納得できるものだったように思います。

振り返ってみると、子どもたちだけでなく、大人である私たちも、この二年間に数々の食育を学ぶ機会をいただくことができました。食育を語り、実践している方がこんなにも多いことに驚きを覚えつつ、勇気をもらっていることは間違いありません。

南浦小学校の食育の旅に終わりはありません。本校の食育の取り組みに関して、農林中金総合研究所、新聞記者、学校給食の雑誌などで注目してくださったみなさまや、北から南から大勢のみなさまからのご協力、ご支援に深く感謝申し上げますながら、全国の大勢のみなさまに食に情熱を注ぐさまざまな方の思いを届けるつもりで、子どもへの取り組みや大人が考える食の姿をまとめ、本書を発刊することといたしました。

今後南浦小学校としての食育の旅は続きます。ゆっくりと、着実な歩みで続けさせていたかどうかと思っています。食育の旅を続けるなかで、新たな発見があったり、当たり前前の良さを再認識したりしていただければ、食育はますます楽しく充実していくと確信しております。

これからも、本校の食の総合プロデューサーとして、子どもたちとともに、大人のみなさまとともに、食育の旅を歩んでいこうと思います。

それでは、二年間の南浦小学校食育の旅に、ご案内させていただきます。